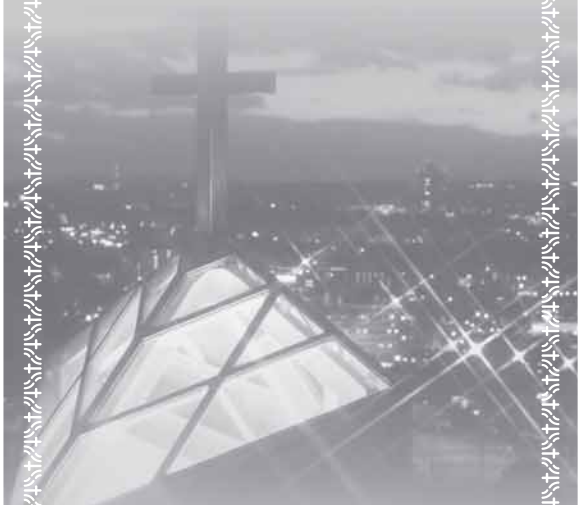
TOHOKU GAKUIN UNIVERSITY

大学礼拝

WORSHIP SERVICE



2010年

クリスマス特集号

CHAPEL NEWS

第115号

巻頭言

「クリスマスの献げ物」

宗教部長
佐々木　哲夫

誕生の知らせに接して思うことは、生まれた赤ちゃんのこと、また、その子のためにどのような贈り物をするかです。イエス・キリストの誕生を祝うクリスマスのときもそうでした。

その地方［ベツレヘム］で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。すると、主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。天使は言った。「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。…」

（ルカ福音書二章八～十一節）

貧しい羊飼いたちは、天使の言葉を聞くとすぐさまイエス・キリストが寝かされている場所へと駆けつけました。夜間における突然の出来事だったので、彼らは贈り物を持っていませんでした。しかし、天使の言葉にすぐさま応答した彼らの姿こそが貴重な献げ物でした。

そして急いで行って、マリアとヨセフ、また飼い葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた。その光景を見て、羊飼いたちは、この幼子について天使が話してくれたことを人々に知らせた。

（ルカ福音書二章十六～十七節）

他方、東の地にいた占星術の学者たちは、星に導かれて、イエス・キリストの誕生の場所へとやってきました。彼らは、贈り物を携えていました。

学者たちはその星を見て喜びにあふれた。家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。

（マタイ福音書二章十～十一節）

二〇一〇年、東北学院大学のクリスマス礼拝に招かれている学生の皆さんは、どのような贈り物を献げることでしょうか。皆さんは、羊飼いと学者の両方の贈り物を献げるのです。すなわち、神の言葉に応答する心と社会福祉に貢献するという贈り物（献金）です。世界の多くの人々と共にクリスマスの恵みを共有したいと思います。

『受けるよりは与える方が幸いである』

（使徒言行録二〇章三五節）

「ぶどう園の労働者」

理事長
平河内　健治

マタイによる福音書第二〇章に「ぶどう園の労働者」のたとえ話が記されています。「天の国は次のようにたとえられる。ある家の主人が、ぶどう園で働く労働者を雇うために夜明けに出かけて行った。主人は、一日につき1デナリオンの約束で、労働者をぶどう園に送った。」という語りで始まります。主人は朝早くから労働者を雇います。

主人は再び九時ごろ出かけ、何もしないで広場に立っている人々を雇います。一二時ごろと三時ごろにまた出て行き、同じように見つけた人々を雇います。五時ごろ行くと、一日中立っていても職のない人々がおり、これらの人々をも雇います。一日の労働が終わり、夕方になって、主人は監督に、「最後に来た者から始めて、最初に来た者まで順に賃金を払ってやりなさい」と命令します。一律に同じ1デナリオンの賃金が支払われました。

最初に雇われた者は当然最後に雇われた者に1デナリオンなら、自分たちにはもっと支払われると期待しますが、同じ金額なので不平を言います。「等価交換」という経済原理からすれば、当然の不平であります。同じ種類の労働で、倍の時間働いた人は倍の報酬を受けるのが当たり前のはずです。主人は文句を言った労働者に、「一日につき1デナリオンの支払いの約束は守っている」と述べ、契約違反にはなっていないと反論します。何か腑に落ちないものを私たちにも感じさせてしまいます。

イエスは、このたとえで、何を伝えようとしているのでしょうか？「天の国」のたとえ話というところに理解のヒントがあります。「天の国」、つまり「神の支配する国」、つまり「神の愛が支配する世界」は等価交換の価値観が支配するものではないということをこのたとえは示しているとみることができます。罪の無いイエスが私たち自身ではどうしようもない罪科（とが）に代わって、神の私たちへの愛のご計画の下、十字架上で処刑され、復活し、今もなお私たちを日々導いているキリストの愛は、等価交換によってもたらされたものではありません。神の一人子イエスの命の犠牲によって、無償の愛によって日々の恵みが与えられています。人間がそれなりのことを神様になしたからというものではなく、むしろ、罪を犯していながらも、それらを受け入れてくださる神様の愛があります。私たちの一日の命の瞬間瞬間に常にキリストの愛がすべての人に平等に働いております。私たちには、キリストの愛に倣う無償の愛の生活が求められています。キリストの慈しみと思いやり、愛の奉仕の生き方です。

しかし、私たちは時に等価交換的な愛の捉え方に誘惑されてしまいます。利益を期待して、他人に親切にしたり、遺産目当てに親の面倒をみたり、老後のケアの見返りに子どもを大事にしたり、恩返しを期待して教え子や友人にだけ丁寧に付き合ったりします。これは大変危険な生き方です。逆に言えば、期待される利益が無い時は愛さない、親切にしない、面倒をみない、大事にしない、丁寧に付き合わないことになるからであり、ひどい場合は期待を裏切られたことから憎しみが生まれます。「目には目を、歯には歯を」の世界です。

今年の九月十八日の夜に、中学三年生の男の子が、東京西神田の公園で、口と耳が不自由なホームレスの男性に熱湯をかけ、大やけどを負わせた事件が起きました。事件三日前にベンチの周りを掃除していた男性が、遊んでいた男子生徒らに身振り手振りで、そこをどくよう指示しましたが、生徒たちが言うことを聞かなかったため、男性は箒を振り回して追い払おうとしたそうですが、男子生徒はそれに腹を立てたと言います。そのため、石や洗剤を投げるなどのいやがらせを一週間前から続けていたそうですが、遂にはいやがらせが大やけどさせるまでに発展してしまったのでした。

この事件については色々と考えさせられるものがありましたが、特に、警察が発表した事件後の男子生徒の反省の言葉とも受け取れる「石を投げるくらいにしておけばよかった。リアクションが面白くてやってしまい、悪いことをした」という言葉からみられる考え方の危険性であります。やり過ぎ、行き過ぎを反省しているのでしょうが、箒を振り回されていやな思いをしたのだから、石を投げるくらいのいやがらせは赦されるという等価交換的な考え方があります。石を投げるのも、やけどさせたのも、いずれも愛の行為で無かった点では同じなのに、自己正当化をしようとしています。口と耳が不自由な男性への「思いやり」はいずれにしてもありません。

イエス・キリストが求めているのは、等価交換的な愛ではありません。「汝の敵を愛せよ」とまで、命令しています。ヨハネによる福音書には「神はその独り子をお与えになるほどに、世を愛された」と記されています。キリストのご降誕を祝うクリスマスはこの神の愛の支配に思いを馳せる時です。キリストとの出会いを求め、「ぶどう園」に招かれ、キリストに倣う働き人としての生き方ができるよう祈りたいと思います。

「北欧のクリスマス」

学院長・大学長
星宮　望

クリスマスの行事は世界中で行なわれていますが、皆さんご存知の通り、十二月といっても地球にはそれぞれの季節があって、日本のような冬の季節ばかりではありません。南半球では、真夏のクリスマスになりますし、地域によってそれぞれに特色あるクリスマスがもたれています。言い換えれば、それぞれの地域風土にそった主イエス・キリストのご生誕を祝う行事があると思います。その一例として、日本からはるか離れた北欧のクリスマスとその季節の行事・風習について少し紹介しましょう。かなり古い話になりますが、私は、一九七五年五月から一九七六年七月にかけて、十四ヶ月をスウェーデンで暮らしました。これは、日瑞基金（Japan-Sweden Foundation）の派遣研究員として、毎年一名日本からスウェーデンに派遣される研究員の選考に合格して、家族四人で滞在することになったものです。そのいきさつの一部は、東北学院大学の刊行印刷物である、ウーラノス Vol.26（二〇〇七年一〇月号）の「スウェーデンの運転免許証―国民番号など―」や、ウーラノス Vol.30（二〇〇九年七月号）の「常識のちがいをこえて」などに記しましたので、まだ読んでいない方は目を通していただきたいと思います。皆さんには、北緯六〇度の地域の冬の状況を思い浮かべることは簡単ではないと思います。日本の周辺で見ますと、北海道のはるか北にあるカラフトの最北端部のさらに北側になります。メキシコ暖流の影響によって、スカンジナビア半島はこのように北にある割には温暖な気候がなんとか保たれていて人があまり苦労なく生活できる環境にあります。私の滞在していたUppsala は、ストックホルムの約八〇km北にある古都でした。Uppsala 大学は、一四七七年に創立されましたので、私が滞在した一九七六年には、来年五百年記念式を行なうということでした。そして、そのすぐそばにある、教会は一四三五年に完成した北欧最大の教会で、しかも北欧最古の歴史をにじませるものでした。十二月のクリスマスの時期になると、歴史に彩られた各種のクリスマス行事が行なわれ、さすがに古くからのキリスト教国であるとの思いを深くいたしました。教会での行事に関することは、このほかにも種々伝えられていると思いますので、ここでは、この季節における北欧（特にスウェーデン）における行事のいくつかを紹介します。まず、十二月上旬におけるスウェーデンの最大のイベントは「ノーベル賞授賞式」です。世界中からの膨大な超一流の研究者の業績に関する推薦を、数年間かけて審査して、その結果を世界中に発表します。その中心に位置するのが、Uppsala 大学の研究者・研究組織です。私は、たまたま、Uppsala 大学における外国人研究者として滞在しておりましたので、一九七五年のノーベル賞授賞式へ招待され、参列することができました。このイベントでは、単に式典が行なわれるだけでなく、その前後に、それらの研究者の研究成果に関する国際的なシンポジウムや講演会が関連大学で行なわれます。私も、ウプサラ大学で開催されたその年のノーベル物理学賞の受賞者の講演会にも参加することができました。

クリスマスの頃になりますと、北極圏に近いこの地方では、冬が長くなります。ストックホルムやウプサラの周辺でも、真冬には、朝明るくなるのが一〇時頃で、午後に暗くなるのが十四時頃になります。従って、幼稚園に行く児童が、暗い道を歩んで幼稚園に行き、薄暗くなった道を歩んで幼稚園から帰ることになります。このようなことは、日本の人には感覚的に理解できないと思います。ともあれ、このように夜が長くて憂鬱な季節を過ごすために、北欧の人々は種々の工夫を凝らしています。クリスマスの季節になると、暗くなった道路に面した、家々の窓辺に、花飾りをともなったローソクが灯されます。これが、各家庭に一斉に灯されますと、なんともいえないような温かい雰囲気が周囲に漂います。そして、各家庭から、小学生くらいの女の子が、白い装束の頭にローソクの冠をつけて。「サンタルチア（ルシア）」の歌を歌いながら各家庭を回ります。これを「ルシヤ祭り」と呼んでいます。この地方の最も有名なお土産品のルシヤ人形がその様子を表しています。「こけし」の北欧版とでもいえましょう。何もないと、寒くて陰鬱な環境に負けそうになる冬の北欧で、住民が長年の習慣と知恵を生かして生活している一面を見せていただき、人間の営みの深さについて考えさせられました。

それぞれの地域風土にそった主イエス・キリストのご生誕を祝う行事があることを覚え、それぞれの地域とその風土にそった風習で主イエスのご誕生を祝いたいと思います。

Christmas Message
「希望を持ち続ける」

キリスト教学科長
原口尚彰

言うことが出来ます。各キャンパスの礼拝堂の聖壇も飾り付けがなされていますが、これは神の子の誕生を祝うクリスマスを迎えるための準備であり、これから週を重ねる度に、クリスマスが確実に近付いて来ます。

アドヴェントの季節を迎えると、私たちはいつも人間の未来への希望ということを考えさせられます。信仰・希望・愛ということが言われますが（第一コリ一三・一三）、信仰が最も基本的な概念であり、信仰に基づいて初めて愛ということが語られ、希望と言うことが語られるのであると思います。信仰が現在に向かうと愛ということになり、未来に向かうと希望ということになります。そこで、今日は信仰と希望について深い考察をしているローマの信徒への手紙五章一節以下の言葉に耳を傾けてみたいと思います。

今日の聖書の言葉を書いたパウロは、若いときにユダヤ教からキリスト教の信仰に入り、一生をキリストの福音の宣教に捧げた人ですが、楽な時期はほとんどなく、いつも反対や迫害に直面しており、命を落としそうになったことさえありました。外的には事態が好転する兆しは見えませんでしたが、彼は決して絶望はしていませんでした。外的困難を越えて、彼が撒いた福音の種は実を結び、迫害に耐えて信徒の数は広がっていました。また、パウロはこの世の生涯を終えると神の栄光に与るとも、キリストの下に召されるとも考えておりました。そのような確信から、「そればかりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです、苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを」と述べています（ローマ五・三―四）。苦難は忍耐する者に希望を与えるのですが、逆に、希望があるからこそ現在の苦難に耐えて生き抜く力がわき出て来るとも言えます。教会は信仰・希望・愛ということを二〇〇〇年前の創成期の頃から大切にしてきました（第二コリント一三・一二）。中でも神への信仰が希望と愛の礎であると言えるでしょう。

希望というと私はヴィクトール・フランクルの『夜と霧』を思い出します。フランクルはオーストラリアのウィーンの精神医学者ですが、ユダヤ人であったためにナチス・ドイツがオーストリアを併合した後に、ナチスの親衛隊に捕らえられて、強制収容所のアウシュビッツに送られます。強制収容所の中では、飢えと寒さの中での強制労働を課された上に、何時ガス室に送られて殺されるかもしれない極限状態の中にフランクルは置かれていましたが、彼は過酷な生活を耐え抜いて、連合軍によって解放されました。彼は強制収容所の中での生活の中で自分や他の人々の心理を精神医として冷静に観察しており、解放後にその体験をまとめたのが『夜と霧』です。

この本の八章は「絶望との戦い」という題が付けられています。ここでフランクルは、収容所の生活の中で人間としての生きる姿勢を保って行くためには、未来に目を向けること、希望を持つことが重要なことを強調しています。一節を引用すると、「（前略）これに対して一つの未来を、彼自身の未来を信じることのできなかった人間は収容所で滅亡していった。未来を失うと共に彼はそのよりどころを失い、内的に崩壊し身体的にも心理的にも転落したのであった。」と書いてあります（霧山徳爾訳『夜と霧』みすず書房、一九八九年、一七九頁）。強制収容所の生活の中では絶望しかないように一見思われますが、むしろ逆境にあってこそ希望を持つことが大切だとフランクルは語ります。人生については最後の一瞬に到るまで諦めてはならない、いつかはこの収容所の生活が終わり、解放されて日常生活の戻ることを望み、解放後に行う自分の課題や、自分を必要としてくれる家族のことを思い自分を保ち続けなければならない。フランクルはそのように考えて強制収容所の生活に耐え抜いて、生還してきました。希望がないように見える状況でも、希望を持ち続けることこそ聖書的な希望と言うことが出来るでしょう。

「このように、わたしたちは信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストによって神との間に平和を得ており、このキリストのお陰で、今の恵みに信仰によって導き入れられ、神の栄光にあずかる希望を誇りにしています。そればかりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです。苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。希望はわたしたちを欺くことがありません。私たちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。」

（ローマの信徒への手紙　五・一―五）

十二月に入って、教会の暦ではアドヴェント（待降節）が始まりました。アドヴェントとは、御子キリストの誕生の前、一ヶ月の季節であり、御子のこの世への到来を待ち望み、相応しい準備をする季節であると

各キャンパスのメッセージ

Izumi

泉キャンパス
大学宗教主任
永井　義之

クリスマスが日本の年中行事として定着していることは、今やほとんど疑いえない事実です。一二月のこの時期にクリスマスが全く影もないというのはあり得ないのです。それほどまで一面身近だと言えるクリスマスなのですが、いつも考えさせられるのは、そのクリスマスは誰が主導しているクリスマスなのかということです。こんにち、クリスマスを主導しているのは商業ベースのクリスマス商戦の一環で、雰囲気やムードに乗せて消費をあおる人々です。クリスマスらしい「何か」を消費しなくても、すなわち、いわゆるクリスマスらしいものは何もなくてもそこに本来のクリスマスがあるならそれで十分ではないでしょうか。皆さんが本来のクリスマスを迎えられますように。

Tagazyo

多賀城キャンパス
大学宗教主任
北　　博

クリスマスは一二月二五日ですが、教会では普通、その前の晩に、ろうそくを使った礼拝が行われます。これが前夜祭、つまりクリスマス・イヴです。礼拝の後、皆でクリスマス・キャロルを歌いながら通りを練り歩いたり、各家庭を訪問したりする教会もあります。これをキャロリングと言います。

ところで、イエス・キリストの誕生の記事はマタイによる福音書一―二章とルカによる福音書一―二章にありますが、誕生日についてはどこにも記されていません。一二月二五日を降誕日として祝う習慣は、四世紀頃ローマにおいて定着したようです。ともあれ、クリスマスはイエス・キリストの降誕を祝うお祭りです。あなたは今年、どのようなクリスマスの過ごし方を予定していますか。ちょっと考えてみては如何でしょう。

Tsuchitoi

土樋キャンパス
大学宗教主任
佐々木 勝彦

「ラーハウザー記念礼拝堂」に入ると、正面にステンドグラスがあります。泉キャンパスのものとちがって、かなりくすんだ年代物という感じがします。皆さんはその制作地を知っていますか。アメリカではありません。これはイギリスから取り寄せられたものです。どのようなルートで仙台まで運ばれ、そして誰が設置したのでしょうか。技師はイギリスから来たのでしょうか。

そもそも誰がその資金を出したのでしょうか。これもビッグ・プレゼントでした。それは「ミセス・シュネダーの幼友達、故J・B・フリッカー長老の二人の娘たちからの指定献金」によって購入したものです。残念ながら、この長老とそのお嬢さんたちのその後について、わたしたちは何も知りません。

戦時中には、このステンドグラスの前に日の丸が飾られ、ついには全体が板で覆われる事態も起こりました。板張り状況のステンドグラスをイメージしてみてください。これもたしかにわたしたちの礼拝堂の歴史の一部なのです。

ステンドグラスのテーマは「使徒たちに最後の祝福を与えて昇天する復活のキリスト」です。それは見る者に、「地の果てまで、証人として」出て行った先人たちの生涯とその働きを思い起こさせずにおきません。

【前号誤記訂正　22行目　正面 → 正門】

1 クリスマスって何ですか？

クリスマス（キリストのミサ）とは、イエス・キリストの誕生を祝うためのミサ（典礼もしくは礼拝）のことです。どうして、イエス・キリストの誕生が、クリスマスとして特別に祝われるのでしょうか。

第一に挙げられる理由は、神が人となられたという出来事だったからです。即ち、被造物の世界において、換言するならば、人間の五感で認知し思考できる世界において、神が人間と出会われた出来事だからです。

第二に挙げられる理由は、旧約聖書の預言者たちが待望していた救い主（メシア）の誕生だったということです。それは、贖いの業（十字架の出来事）によって人間の罪を赦すという救いを実現する神の子の到来でした。ペトロの手紙は、そのことを「（イエス・キリストは）十字架にかかって、自らその身にわたしたちの罪を担ってくださいました。わたしたちが、罪に対して死んで、義によって生きるようになるためです。そのお受けになった傷によって、あなたがたはいやされました」（一ペトロ二章二四節）と証言しています。

六世紀の修道僧ディオニシウス・エクシグウスは、聖書に記載されている年代とローマ皇帝の治世年数とを累積対照することによって、イエス・キリストの誕生の年数を割り出し、それを境に歴史を紀元前（B. C. = Before Christ）と紀元後（A. D. = Anno Domini）に二分しました。それほどに、イエス・キリストの誕生は画期的な出来事だったのです。

皆さんは、クリスマスをどのように理解しているでしょうか。それは、クリスマスの日に何をするかで明らかにされます。プレゼントを交換する、みんなで楽しくパーティをするなど様々でしょう。今年のクリスマスは、東北学院大学の礼拝堂やキリスト教会で行なわれるクリスマス礼拝に出席し、本当のクリスマスの意味を体験していただきたいと思います。

2 なぜ12月25日がクリスマスなのですか？

四世紀ローマ帝国の国教となったキリスト教は、その後ローマ帝国が東西に分裂したのに伴い、ローマを中心とする西方教会とコンスタンチノープルを中心とする東方教会に分かれました。クリスマスの祝い方においても両者の間に違いが生じてきました。

西方教会（ローマ・カトリック・プロテスタント）の伝統では、三世紀の末頃からキリストの誕降日として守られて来ました。東方教会（ギリシャ正教系）では四世紀頃から一月六日公現日に降誕を同時に祝って来ましたが、西方教会との調整を経て、十二月二五日には降誕を一月六日には異邦人への救い主到来を祝うようになりました。

なぜ十二月二五日なのかについては、古代教会で考えられていた独特の歴史観にもとづく日にちの算定があるようです。また、冬至に近いことから異教の「太陽の誕生」祭に対抗して「義の太陽」（＝キリスト）の出現を祝ったものであるとも言われますが確かなことはわかりません。ひとつ確実なことは四世紀から五世紀にかけてキリストの受肉と人格に関する論争があり、キリスト養子論の、異端説を退けるために、キリストは神の御子として誕生されたことが東西両教会で強調されたという事実です。つまり、クリスマスを十二月二五日に祝うということは「今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった」（ルカ二・十一）という、神の御子が人間の形をとり（受肉）、私たちの近くにおいでになったことを意味します。

キリスト教 Q&A

3 クリスマスはキリスト教の他の行事と比べてどのくらい重要なのですか？

キリスト教の主要な行事は、イエス・キリストの生涯に由来しています。例えば、イエス・キリストの誕生を祝うクリスマス（降誕日）、東方の占星術者たちが訪れて主イエスを礼拝したことを記念する公現日（顕現日）、復活日の四〇日前の水曜日（六回の日曜日を除く）を灰の水曜日、また、この四〇日間を四旬節（受難節、レント）と呼び、特に、四旬節最後の週を受難週（Passion Week）と呼んでいます。受難週の金曜日は、イエス・キリストが十字架につけられた聖金曜日（Good Friday）、次の日曜日は復活日（イースター）です。復活日から五〇日目の日曜日に聖霊が降り、教会が誕生しました（聖霊降臨日＝ペンテコステ＝五旬祭）。このようなキリスト教行事を織り込んだ暦を教会暦と呼んでいます。この暦は、クリスマス前の四主日を含む一月六日までの期間である待降節（アドヴェント）の第一主日から始まります。

さて、教会暦と直接関係しない行事もあります。聖餐式、洗礼式、幼児祝福式、母の日、花の日、収穫感謝日、婚約式、結婚式、葬式、昇天者記念式などです。いずれの行事も意義深いもので、その重要さに優劣をつけることは難しいことです。しかし、強いられるならば、クリスマスとイースターを双璧として挙げることができるでしょう。特に、クリスマスは、東北学院大学の学事暦の中においても公にされており、大学クリスマス礼拝としてまもられています。

4 大学でのクリスマス礼拝ではどのようなことをするのですか？

十二月、冬休みを前に大学の講義も終了に近づく時期、大学クリスマス礼拝が各キャンパスでおこなわれます。特別な礼拝と位置づけられ、春、秋の特別伝道礼拝のように、時間的にも毎日の礼拝の時間枠に加えて二時限目の時間も使ってクリスマス礼拝が行われます。この日には特別講師によるクリスマスメッセージと特別編成の学生合唱団による「メサイア」（ヘンデル作曲）が演奏されます。

この礼拝が毎日の礼拝と異なるところは、礼拝のなかで献金があることです。世間一般でも年末助け合いなど、この時期に寄付を募っていますが、私たちも礼拝で集めた献金を、援助を必要とするさまざまな福祉施設やNPO団体、個人にその働きを助け励ますために送金しています。送金先及び送金額の詳細は、翌年一月発行の東北学院時報に掲載し報告させていただいております。

大部分の一年生諸君にとっては、東北学院に入って初めてのクリスマス礼拝を今回迎えることと思います。いままで経験して来たクリスマスと大学で経験するクリスマス礼拝に違いはあるのでしょうか。ぜひ、クリスマスメッセージを通して本来のクリスマスとは何であったのかを確認していただきたいと願っています。

また、献金を通して、私たちのわずかな献げ物であっても、それが必要とする人々に届けられ喜んでいただけるのは、このクリスマスの喜びのときにふさわしいものです。いままではクリスマスプレゼントといえば「受ける」だけのものでしたが、本当に必要としている人々に「与える」ことを学ぶのも、このクリスマスが意義あるものとなるのではないでしょうか。

「また主イエス御自身が『受けるよりは与える方が幸いである』と言われた言葉を思い出すように・・・」（使徒言行録二〇：三五）

2010年度　宗教部の活動

通　年

大学礼拝
礼拝（朝）土樋・泉・多賀城キャンパス　月～土曜日
礼拝（夜）土樋キャンパス　毎週水曜日
寄宿舎礼拝
泉女子寄宿舎　毎週月曜日
泉寄宿舎・旭ヶ岡寄宿舎　毎週火曜日
聖書研究会
土樋・泉・多賀城キャンパス
宗教部会　毎月

四月

『大学礼拝：チャペルニュース』
一一二号（新入生歓迎号）発行
二〇一〇 キリスト教活動の
ハンドブック発行
第一五回スプリングカレッジ（一七日）

五月

春季宗教教育強調週間特別伝道礼拝
・泉キャンパス　（一二日）
・土樋キャンパス［朝］（十三日）
説教者　倉橋康夫 牧師
（日本基督教団富士見町教会）
・多賀城キャンパス　（一二日）
・土樋キャンパス［夜］（一二日）
説教者　小堀康彦 牧師
（日本基督教団富山鹿島町教会）

六月

『大学礼拝：チャペルニュース』一一三号
（春季特別伝道礼拝特集号）発行
礼拝奉仕者懇談会
・土樋キャンパス　（九日）
・泉キャンパス　（九日）
キリスト者等推薦学生との懇談会（五日）
礼拝奉仕者懇談会
・多賀城キャンパス　（一五日）
第三四回青山学院大学
合同チャプレン会議（一七～一八日）

八月

第三六回サマーカレッジ
（一一日～一三日）

九月

第五六回教職員修養会
（八月三一日～九月一日）
講師　北城恪太郎 氏
（日本アイ・ビー・エム株式会社最高顧問）

一〇月

秋季宗教教育強調週間
特別伝道礼拝
・泉キャンパス　（五日）
・土樋キャンパス［朝］　（六日）
説教者　棟居　勇 氏
（日本基督教団正教師
好善社理事長）
・多賀城キャンパス　（六日）
・土樋キャンパス［夜］　（六日）
説教者　三吉信彦 牧師
（日本基督教団千葉教会）

一一月

『大学礼拝：チャペルニュース』一一四号
（サマーカレッジ・秋季特別伝道
礼拝特集号）発行
第二二回泉キャンパスクリスマス
（三日）
キリスト者等推薦学生との懇談会
（一三日）
『大学礼拝：チャペルニュース』
一一五号（クリスマス特集号）発行
大学クリスマス
・泉・土樋キャンパス　（一六日）
・多賀城キャンパス　（一七日）
説教者　中野　実 氏
（東京神学大学准教授）

二〇一一年

一月　第一五回キリスト者教員研修会（一四日）

二月　礼拝オルガニスト懇談会　（一四日）
礼拝司会者（牧師・宣教師）懇談会
（一四日）

三月　大学礼拝説教集 第一五号発行
研修会・修養会発題報告集発行

編集後記

昨年までは、今号が配布される時期は講義終了日のクリスマス礼拝で、翌日からは冬休みでした。今年から大学クリスマス礼拝の日と講義終了日は必ずしも一致しないことになりました。クリスマス礼拝の後も普段の大学礼拝が授業終了日まで続きます。是非、最終日まで大学礼拝に出席してくださるようお勧めします。

（NA）

二〇一〇年十二月　東北学院大学宗教部
〒九八〇―八五一
仙台市青葉区土樋一丁目三番一号